朝夷巡嶋記

三

春

つ
40
75

10 番號
40 冊數

へ13
3093
33

吉田屋

吉田屋

朝夷巡島記全傳第七編卷之三

東都　松亭金水編輯

續輯第五

豺狼難義漢非命死　兇賊為陷忠良士

再説腰越獄六郎ハ。かの書戍熟と視届らし。忽地堂戍礙と拍て。この水弗の文字ふちり〻想ひ當て〜ここそあと。尙の漢士ハ北條刀称の。近習ふ在て窕を拾う。湯嶋鳥沸太郎とハ。ものの。在下渠。とび平生ふ恐もど。渠僥倖ふ吾戍知ぞ。ふ戍りて。見と想ふふ。水弗とハ渠ゞ名の。沸と両段ふ拆たるゑ〜ん。されば此方の強去てふ。全く朝夷主ゑ〜ん。遊莫朝夷主ハ。今鎌倉ふ在もる戍。渠ふの密書ハ携へて。何方へ往く何と謀るや。その赴戍解〜がて〜と。戍戍又きて沉吟とうと。とう。かの舩頭ふ打扮て。沸太ゞ盤渥戍奪ひ〜漢士。進ゞ出てのゆうハ。吾〜倖の様

昭九　文二三　横浜

門 へ13
號 3093
卷 33

へ来れど。朝夷刀称い先の日ふ陸奥へやらん仕はとて。まの逐電通らまさり。勿論
将軍家の使ありと。人の呼ふ吹及べき。といふ伐吹て獣六郎。その想ひも掛ざるる
うる。若きまそれが実言ゆて。陸奥へ赴れるて。陥阱の媒ま。行いまもまぐれふのぐぞ。
危ふ〳〵く須ゆきて。少しも早くこまと若をい。無越大事と曳出さん。夜の明る間も程遠
せんや。と旅の用度弦把出をあぞ。猛八い霎時と迫め。足下が胸中さることぐ〳〵。今急ふ
出立とも。途ふて逐著べきふあ〳〵ぞ。ようやその事知〳〵ぞとも。然る浅ることる計技ふ。
陥べき朝夷ふ〳〵ぞ。夜明るが在下ちも。足下と倶ふ逐伐暮して。陸奥へ往べきあり。
といふ腰越大ふ歓び。志い致をりのう〳〵。年老く要ふさぞ。和君ふ主侵諸共ふ往
ふ〳〵が大慶ふり。殊ふ在下い岩井ふ返翰と所持おすう〳〵。朝夷主が縁金ふ在
さぬふ〳〵がる筋。ありとも逐伐逐うけて。往ねが使の詮ふ。況て大事と必〳〵。
夜と日ふ継で来らんぞ。去来こ准備と急ぐ〳〵とゆふりて猛八。西三人を

爰ふ狂め残まる者かこるる俱して。未明ふまる伐立出んと。卒ふ旅の用度と聚め。兎
角するまふ白〳〵と東雲ふ〳〵む須ふ。ふれい。去来こて上下十人許り。陸奥へ立
出ぞり。却説朝夷義秀へ。冨ふ縁金と発足しく。日々しを武義の出へ。ぞかの
朋友ある吉見冠者。まこ光仲の領地ふる。太田の荘も程遠〳〵。借に昨おらん
ふい立ふりて対面ふ。其後のこも逐一ふ。物語〳〵まく〳〵思へども。這回い公の使ふ。
私事ふ半日も。空くもるい忠ふ〳〵ぞ。禹へ平世の時ふ当。三ヶ所門を過ざく
入らば。況や舊友と訪ふとや。然るが〳〵ふ音信せぬ義を遺
るふ仇こるるれば。こ吉りんの領地石戸の荘へ。三草太郎五まこ太田へ城戸四郎伐
使ふて。這回如此このうとも。陸奥へ発ふつき立寄まくい存ずれども。公務と後ふ
あるべれふ〳〵ぞ。使と成て舊情を。述るまでふいと。その伐の日食荒河の渡口
伐超て。彼二人と出遣て。汝ら彼処の要往らば順路伐需めて来べ。必吾ふ逐芸ん

として。山路をたどる。波瀾をくぐりて。若光仲麻呂諸俱ふ来りて吾を訪んといふとも。開
強ふ面汚べーと。逸をふ諭をふをん。心得ざんと。両個の去い。領掌をしてその所を。道汀
ちぐくて立別をぬ。朝夷いをうして。遺るい半下の雑人のこ。言葉敵ふあるものあるべ。
然をば終日馬ふ跨をて。遠近の山水をど。己が心のゆく隨ふて。瞻望やりてゆく
ものどふ。右視をば傍ふ一宇の堂あり。その檐口ふ金字あり。大聖堂とあると祝を。
あい不動をと祝をるをんをと往昔ようこの像ふ多く結縁のあるるれど。
去来をちうて洋りて往んと。裏波引ひけて。徐ーと歩ませゆきやとー堂前ふて馬より
下ちて。要時祈念して立あがり。猶その遠の風景をうち眺望ふあらいこれ。武蔵と下
野の界ふーて。所の名をびようくも知ねど。山をと山の高く聳え折しも秋の末あをば。
紅栄黄落の梢波雑へ。そのさまいとも興あをば思らんまよ徨ふて。皆く在しをあの
堂内ふ人の叫く聚をきこを。朝夷耳をうをー。人迹絶るこの所ふ怪しきをとをー。

正をく人の声をれば。倘旅人の疾をど。発をーくこふ悩むふや。然ものーば不便のこをのり。と
頓て自ら階波登をて。やをーー扉波押あけ祝をば。惣身血ふ深てその傷ふ血の着る腰力
と捨ーり。あをこふ正をく山賊ふ。逐をーーのをとをく祝ーふ。行本をるこの包こをのりて。引剥ふ
遭をる斜ふもの。何をを不便のこをりーつ。ーと侍へ近づき。大音をのげてを旅人いち
るをば斯のとき。為体ゆいをりーをる。乳波室をふてその仔細と。疾くーとの人声の耳
ふ入をてや苦しげをる。息と吻て衝こふ。やをーー頭と搖げつ。眼をとうち開きてこを波ふ。
朝夷を者を下ふ。腰と座ゆつ旅人ど顔と覗きて互ふ怕ーをを一三翁をーー如何ふと。
いふ疵員を瞳と定ゆ。然いーをん身い阿工どのー。朝夷めーーをこふ如何ふ。此処ーを
面あいをんとふ。今の今まで知ーぎり知と。老い涙の脱けをば喜ーきふをまーー波ーー。
身の苦痛とを人忘ーー斗をを。忽地形を改ゆんとををば救筒所ふ疵と履て。進退更ふ
自由と汚ば。朝夷い携ーを傷ふ。諸ふとーけて抱起て。什麼翁といをる筋ふ此処を祈と

呻吟すべきまと如何ともすべ此のごとく。疵と負ひて氣遣ーと。問ふ一三数回。欲息ーて
さてのみ。是ふい種この仔細なり。拝ふいのえで一朝ふ説尽きべきものあらねど心地苦
えく長くと。物荒くべき氣力ないまで。まづ肝要のと言へ。先頃和殿ハ鎌倉へ飯ら
まて後も功とえて。将軍うなの近臣ふ擇ミ立されうとのと。箇ふ腰越生とーて書
輪と綸りのひーうべ。判五ふも尼ハ苛ふも。歓びうくと限りなく。殊ふ江の三三廣光ぬ。
俱ふ未まて吉りんの冠者ぶちんすの為ふ救ひまて。石戸の荘ミ湯ひりしとも落なく
欽びまえ。その渾家の淺良井と。ふ三三とも伴ひて。逗ふ石戸へ飯らんと。是まで長月月
と日ふ。鵠恩稟ーて成辦ー。旅装とする間ふ判五ものと叢雲の。時ふ群ーー心地
ーて。是うく後ハ吉左右と。重くもまんものと。郷の甲乙與び集め。嬉ーきまてふその
綷のう。弦具ふ物語て。祝酒とうん振舞て。ひと派ーく日と送りて。ものと淺良井も
旅准備。数ひすとのくまふ。腰越生ふ返翰とまて。まと石戸まで両三人の物持ども

と雇ひて。上下都て七八人。別て後告て立出らまて。其夜子一刻の頃ありけん。強盗
卒ふ押入まて。下奴婢女殘ーまて。縄うち数て柱へ縛ぎ。五五す又とまそふ突立
妻と揚るば切んとのふ。衆恐まて震ひ戦慄。人ふあるとも。なえがぬ。頓て盗
人の張本ある。魔五平とのくるものぱるーー奥へ踏入まて。判五を捕へ彼への。黄金と
出せと責罵る。生憎ある。その夜ふ限て。巴の尼ぶ物中ふ。ものう腹の痛む
とて。いとく苦ーえ容ある。まと有病て。まーせんと。吾と一人の婢女とを。彼の
離舎ふとりて。介抱せーぶ。その夜中ふ。やを怠りしとのふう。其侭ある処ふ後ふ
掛て。間睡ーまく母屋の方ふ賊の入まーと一点ある。判五ぶ傍ふ田窪姥。乳母ふ抱
うと臥ーうーと。是ふ賊ハ縛ーなげて。只管判五と責るふ。ひとく今ハ何とのと詮
方なく。多くもなくねど貯への。限ーと共ふえ去せんと。至幸と誘ーて。庫へのき。莫
金銭出ーー。ーーとて。賊ぶ。ふとまて。奪ひてーーう。その頃人の

いとときけば。汝ハ朝夷ら泰山ゐて。見る女の子ハ朝夷が。産の児なりとゆメ及ぶ。其を
一昨年朝夷が。為ふ命と隈一なる。山の神魔平太ゞ家。磨忍五平と名ゝるものゝ。その頃ハ
陸奥の。紅仕大人が麾下ふ在て。雑所落ともなりし。紅仕亡びてまゝく帰ゝ。兄ふ
捕ゝて山寨の。首領となりて彼処ふ居る。兄の恨ゝと親いんりのゝ。その讎と何
ふふ。朝夷なりと定ゝふ必ゞ。来ハ今鎌倉ゆて。将軍家の近臣ゝ。輙くゝとゝ難
紂がゝ。その仮類なる汝等ゝ。対取るもまゝ兄への孝娘覚悟なせよゝ。ふゝ早く。
氷ふ森一太刀ぬき翳一。切つけらまて且くゝ。支えゝれども渠ハ多勢。此ハ一人の老躰
ふて。おゝ〳〵敵まゞきなゝず。肩先四五寸砂竜ゝ。嗟と仰向ふ倒るゝとりしも。遂ゝ
刀ふ手悲やゝ。で一刀ふ田舎姫。丹後西ふ脇ゝ。富下乳母ハ待の縄弛ゝと
僥倖ふ。賊等が双戦撥潜ゝ。様ゝ下ハ飛ゝ。賊ゝ〳〵と叫ぶ声。ゝふれ如く
ゆふゝゝ。駭き目覚ゝて其所ふあゝ。棒ゝ把て立出ハ。母屋へ来まゞゝ。紙ハ

その仮ゝて逃去ゝ。ゝまゝハ判五ゝ援け起ハ。侍ゝらまゝ下奴等ゝ。乳母ふ解
ハて遠近ハ捜ゝ。老人の介抱手ふゝと尽ゝ。その深疵のゝ。ゝ日
命ふ。捕ゝゝ孫ゝふ眼前非業ふ死ゝ。その歎ゝ腸断離肉ふ働き。竟ふ
明日の晩方ふ黄泉の人ゝ。ゝ伏ゝ。巴の尾もこの歎ゝ。ふ伏ゝ食ゝ。
開ハ理ふ。ゝ斯ゝ。ゝ果ゝと練ゝ。ゝ西他野ゝ送ゝ。ゝ
る戦片時の早く四三ゝ。ゝ年老ゝ。ゝ吾ゝ漢ゝ。ゝ
ハ逃ふ非ゝ。ゝ日ゝ。ゝ尾ゝ。ゝ矢庭ふ彼地ゝ発足ゝ。ゝ
けゝ老の果敢ゝ。ゝ道ゝ。ゝ昨日の残暮前の宿ゝ。ゝ来ふ。ゝ
三里ゝ。ゝ人里ゝ。ゝ其所ゝ。ゝ
旅ゝ。ゝ早く泊ゝ。ゝ意ゝ。ゝ三里ゝ。ゝ初夜ゝ。ゝ先の宿ゝ。ゝ行ゝ。
ゝ林原ゝ。ゝ時ふ日ゝ。ゝ物の黒白ゝ。ゝ道ゝ。ゝ内ゝ。ゝ

朝夷
一三よ遣て
往事を
聴く
物ひろ

これ前の宿へやとりぬと成。今宵は後世あて準備を持て殺人とゝろ照りつゞく序に彼の
棘ゝ〳〵と音するまゝに残きて見れば是ゆん狼の小笹を下に交尾てゝまりゝ長下心思い
ふゆう。吾雅犯ゝ出ゝ出ゝとゆり山路に入て狼の交尾とゆんきゝの狼何方へとも屋
濃ひて其の人と懐ゝて思ひもうもなきゝめとゝろゝ忘れと做さゝと小足亀りと
一歩も伸に胸の太く裏くゝ。初て自然殃ひに遭んとも計らるゝ如何せんと考ゝ
此方に小の辻堂のありけるに。こゝ屋竟の陋ゝゝ此処にて夜と明しまい伺ゝ忘れの
あるべきと近ゝ見るに不動の堂ゝ。永未この才信ゝ。明王ゝれいとゝ憑しいさ
とて扉とあひき。裡に入ゝて猶と堅くしゝて尊像に向ゝ祈念ゝて其所に
居つ前の宿に調ゝ。餅ゝを出て食ひ。夜の更ゝまく肌寒きに。堪へて在しゝ何時と
ゝ。歓哉ゝと間睡ゝゝ。縁の下に物あり。滅雑ゝと戦ゝ音ゝゝに身体
起しゝその事と窺ふに。ゝと筒の狼ゝゝ。ゝ未ゝ

と思へばいとで牙も戦慄ゝて。更に生ゝる心地もなかりゝ。如何に猛くとも。我も一
個の丈夫ゝと獣の爲に咬まんやと。牙と固めて在ゝに。頓て傍の様の板杖ゝと
撓倖狼に牙を立て噬ゝ散し。矢庭に踊て出ゝ。ゝ力抜放ち。あらば
砕んと待蒐ゝ。ゝ浮に左右ゝ。ゝも眼と怒ら〜牙と咥ゝ爪と磨
立て躍ゝ狂ふ。所に つきて赤一匹。後の方より飛つゝ。ゝ見まゝと力減究竟。
前ゝ奴ゝ発矢と砕ゝ。一声ゝ叫びも敢ゝ様の穴へ逃入間に。ゝらゝ
三四箇所。衣のうへより咬ひつゝて。痛ゝに堪ゝ力ゝ振向て肩のあゝと
砕ゝと覚えて倒きたるが。更に其後のゝ知らず。暫くありて心づく者ゝ潭
然に滴る鮮血狂ゝその疼ゝ堪がゝて。牙ゝ動ゝとゝ。ゝ絞ら
んゝとゝ尊ゝき明王の。廣前で死ぬるゝ仏縁の辱ゝとゝ。この一條と思ゝ
どの不告ゝとゝ妄念ゝれと。今盤に除ゝて夫ゝとゝ心掛ゝ思ゝ

かけを和殿ふ遭て息あるうらふ物いふことを汚うる尊とる冥明王の加護あや
わ〜ん泰〜と。長物語も苦痛の経。朝夷一什と咒ぐふ。或ひい悲こあるひを
怒っ。う得ふ猛き心ふも涙い滝と止めあくを悲歎ゆるうこうるけまども。過うを
い今面へかへらを。まう差當るこの癖負及いあまをも療養の手業ことを肝要ゑれ。
と持合一うる茶とあ〜ゑ。着替の小袖何らと。納て早せ〜長櫃と。開ゑを東西を
把出。ときこそば袱ふ包ませて。備かの明うる唐櫃へ〜一三とあ〜いまて。両個の
下部ふ早擔ひ。宇治江の邑ふ到ア。ての旅店ふ冊き入ま。医師を招き種こと。
心を尽して労いまど。太く心を労せ〜うふ急所を嗜まて。こるれば茶功とまて救
ひう〜〜竟ふこの暁方ふ。果敢ゆ〜〜息の絶一ゑ。朝夷三郎義秀ハ悔ふまど
こい始めより。思ひ〜〜も千ふ一。伝うる術もの〜ん元と。心を盡せ〜甲非ゆ〜ふ。
かの一三ゑ枕方ふ。ゑを文ゑを吐息吻き。善悪自然報あり。賢き人の言葉ゑ。

寓言ふ似うるうゑ。この一三ふ限ゑて。悪死嗜ゑ竟ふ変化。まこゑまく〜が身ふ取て。
家旅ゑ及ひぬ信切実義人を救ふと。楽とゑ。砕その身の栄利とゑ。現ふ善
人とも称すべき性ゑてのしと奈何ゑれば。獣の為ふ命を隕ゑ。所謂前世の宿業
こい。こまを。のゑとい。ふやあ〜ん。仏説の如く人死〜て。まこ来世あるゑ。〜〜ば。這
四八王八貴人とゑ。生ゑ果報殺ひゑ。南无阿弥陀仏弥陀仏。唱へて頓て宿の
主ふ。指何ゑ〜ゑ。逃ら〜て。その明の日ゑ遠の香華院へ葬ゑて。布施と救多も
僧ふ贈ゑ。積経慰懃ふ吊ひけ。かく〜て朝夷三両ゑ。の砂金と旅店の主ふ與ゑ。獣
の所為こいひ〜。彼堂前と掾〜れば。浄むべくい洗ひ清め。まこ破ゑる板と張
久彼処と守護する僧わ〜ば。そまふ課ゑて経と積せ。明王の憤ゑと張めよ。あ
雑費ふ充ゑし。吾猶ゑふ迚まりて。支ゑるのゑを計らひけまど。将軍家の使
うまこば。長く遅らべきふわ〜ば。逸こふひ合め。その明の日発足して。陸奥へと

到まろ。粤ふ湯島沸太郎ハ思ひもうけぬ路用を奪ひまと。大ふ恥と暉うせ
ろど。密の使ふ主ゐるるれば。文とも忍びて這こふ。彼処とこち出ん。着掠と泊て
些ざろの。殘とゐて盤纏こる。夜と日ふ嗣で走ゐんどふ。日あゐ志陸奥人
到ゐ。着さ。磐城へゆれて案内こる。北條刀称うり密の使ふ。来りゐるゐ。いひ
ゐるまべ。盤城四郎時直ハ何ゐりやと自身ちゐ出ゐるふ見ゐん紛ひゐれ湯島
ふゐ。ありけまべ。まつ此方へ。案内して。閑室へともゐひへも。長途のつゐまと
屡労ひさてその使のゐ殘間ふ。仮初ゐゐれ大事ゐまべ。傍の人と遠さけゐと。
侍女ゐまで退ゐ。声と低めて在下ゐ使ふ主ゐ如此さゐり。勿論その主ゐ時
君の密書と授ゐまひひゐ。箇様ゐその次第ふゐて。盤纏と共ふ失ゐひつ。
心苦ゐ限りいゐけまど。文神都て隠沼と用ひ。餘人ハ看ることも解すべゐべ
と。ゐ時君の宣へべ。聊心易さゐりと。縡詳ふ演説すれば。四郎時直ゐ畢ゐ足

下ゐ使節ふ主らまとれば。別ふ書翰ハなくもあまと。然ゐゐ。假初ゐゐれ大事
の密計ゐるふりて。そゐ證ふ書翰とべ。據らまゐものと覓ゐ。然ゐと途ふて
憶ゐき。災難ふ遭て失ゐハまゐハ。足下ゐ蔑忽ゐるものゐ。いよゐ隠語を
ゐて記ゐまゐふ。相違なくハ心易し。さてその密計朝夷主僕陷阱の計策ハ。
ゐれふ似れど行ひゐけん。足下ゐ言葉とゐて量ゐふ。ゐや途ふ二両日の猶豫
ありとも翌ハ此地へ到着せんと疑ひゐ。さればその間短ゐうゐ。縡と計ゐふ
甚便ゐ。ゐや執権の密意ゐりとも。時宜ふ就て計ゐふ若も足下ハ奈何
ふ思ひゐふとゐべ湯島点頭て貴所の高論ゐゐ意も同ど。元来かの朝夷ハ。
尋常ゐる者ふあゐも。粗その号もゐまゐん。されば勲のゐとまて。猶ゐれ
んとする時ハ。却て渠ふ見透さま。縡と徨ゐのこゐゐ。ものゐき珍事ゐ出
来ゐんゐゐ。思維ゐゐと。額と合せ変と呑て。種こふ商議すまと元来

短才愚蒙の徒。胸中さゝふ昏迷して。徒ふ労しゝ。吐息吻てゑ浅又き。ゑ素ふ暗きるその折ゝ。咳二ッ三ッゑして。間の隔紙開るのあり。両個ハ忽地怪然と。孩きそうかゝるふ見ゑん當所の陣代ゆて。阿武隈太夫ありけるこ。能城四郎ハ頬ふくらし。汝ハ若の要あるこ。案内もゑさでこゝへ来る。こハ孫兵北條大人より。密の使節ふ立れる。湯島生とハふ人ゑり。吾ハ兎もあゝ賓客へ礼ゑ礼挙動ゑるべゝと。嗜ゑゆらるて阿武隈ハ。そを処へ坐とトめゑ浅つゝえて。在下刀称へ密談の。一幾ありて。糸りゝと。鎌倉よりの使ざゆと物譚らふて在そときけばうち驚うんもう得ふて。次ふ控へて果ら浅候と良半晌の後ふ及び。ゆとゆゑ耳ふ入る。その密談ハ朝夷と陷いるべき計策と。主客で兎や角案ずゆゑ然りとのゝどもかの和郎ハ。既ふ當国ふて本事と成り。古今無双の猛者ゆるとハ。牛ヤ童も知りめるとゑ。ゑゝ〳〵ゑ強き和郎ゑるこハ。計らんと表彩ー

然るふ在下忽地ふ一箇の奇計と案ト出ー。是ふ起うるとゆじと。胸まゝ頭りふ踊るまで思ふゆゝ。賓客の在るゝ浅知りゑゝ。いゝで遽ふ告んと思ふ。彩ゝ〳〵ー糸らせる。无禅ハ赦しゆられと。陪れバ湯島北更咲ゑ。磐城の大人とゑる個ゞ他ふハ。洩さゞと思ひーと。凝ゑる思案ふ刻高く。既ふ足下ふ知ゝまーよゑ。然りゝ〳〵そをふつき。奇計ありとハ何ゝり重畳若縡ゑゝバ北條刀称ゆ。ゑゑゆゞて恩賞あゝせん。頓ゝそれと。ゆーねと。頭ゝふ膝の進むと覚えゞ。まと時亜も緒共ふ。太未ゝそれと。ゆま欲と。顔うち成ゝて。問ゞふ阿武隈ハ形と改ゑる。その計策ハ他ゑゝ。今刀称の左右ふ侍らー。且暮寵愛ゑーゆふ。處女磐ゑゆ其始め在下ゞ家ふ在ーと。離ゑいーて側室ふと。乞ゑるまゝふ。ゑゝもこの春ハ鎌へ上て。ゑうハ二ゑき者と思さゝ。既ふ内室ふ。ゑんまでこの頃も宜ひつるゞ。その素性未歴ゝといまゞ刀称へ言ゑねバ。ゞ在下ゞ尼公の處女とのゝ。ゞゑゑ

べ。渠ら先亡の賊主經任が一二の者と称へらるる。鉄眉矢藤五が妹なり。
て矢藤五經任が所業を見限り。の山寨を独退くと云ふ至て。遺ーかんと俤
なり思ひ。携へてハ出ーうど。彼の性先も定まらぬ妹と俱ないのより便り。
まるふ於て在下が家ふ訪来て竊ふいふゆう。吾と足下ハ竹馬の友ふて。互ふ味器
なりしが。且不良の心と起して。經任ふ属ーより。胡越千年の隔てと迄。今窮迫
の時ふ臨て。見ゆるとの面なけまど。吾經任が所業と踏て。今霄既ふ山寨ふ
去りぬ然ーとりくども国中の人民吾と恐るるるまふふ足と注めるて。他郷へ
走りて非と改ゆ。汝と偕ゆんと欲すとども。何方とへる宛いな。されハ是なる妹
の磐ふ。彼処へ遺ふいふ不便さふ。是まで伴ひ出れど。一所不住の身ふ於ていふよ
なる紀足ふ渥なり。足下在下が非と宥め。舊友の情と思ひなるべ。今よりまふふ
岡て。婢とも倣ーのふるバ。莫大の鵠恩なり。この義況誘ひまふまと。餘義もなく

いのふより。今よりその非と改めんと言いとりー覚束なけまど。窮鳥懐ふ入時ハ。
猟夫も是と捕さとふ。況て婦女子一人と。頼ひとりとも何ぞの害ふのんと是と
憐ふ快く諾ひて。家ふ畜めおきふひーが刀称ハこま我れ。ひてその容色の秀葉
なるを。悦びなひて側女ふと。命ぜるるる其意ふ任ー。此館へあげてれひーが。渡ふいふ
川ぞちハ川で果るのあるひふて。矢藤五その非と改めず。押宮ーさへ詐偽て。黄金の
柱と盗ーと云是ふよりて。伊豆の国。大城ふおいて義秀ふ誅せ。まーとしふ凡。
隠ともるるゆふふるふとふ。怒ふ窮ふ恐ふ嘆きふの頃在下ふ言ふ。妻果報
の拙なるて。女と生まー甲斐なるさふハ現在兄の敵なる。朝夷義秀ハ深恩ふ在
ーなまど一太刀も。恨ゆるとのなるチーて。餘所ふ見倣を行惜ーさ通ふ壮夫
ふてなるんふいいなを敵と安穏ふ。活おくべ兄と歯と切ーとち歌くるない雄
なるもまーふ憑なるもふひーうと固矢藤五いおなけるき。罪と犯して縁ふ伏さ

朝夷こまと戮すとのくどもおまこ実ハ天誅なり。爭怨むるとあくんと。論ー
ふけまこど女子心ふ。猶朝夷と切ふ恨こぬ。然まこば箇様こふ計まこ如此こ
とのひ合めて。緯を行がまるるべば。万ふ一つも仕損まべくば。緯十分ふ仕課せるべ
鎌倉殿の検断使と。害ーこうこのめと名こてまこ磐ふとも云者こ思ば。
密計おるう三個の他ふ。誰ら一人おるるのあんとの謀ハ奈何ふと猜こうふ。のあ
と湯島ゆあくまこの計策究めこと。阿武隈ーくも考へたうと。称賛ーく
般若城と祝ゆ。貴所いのふと問まこて。怒城ハ兎斯の言葉もるこ俯て
黙然これば。阿武隈そまこ心と察ー。刀称ふ磐ふと慈このふふうて其心
決ーうぬるこ思ふ。こ一奥婦ふ愛恋ーて。この計策と失ふ。後の崇も
護ふ影ーこいたせも敢まこ湯島ゆ口と揃へ〜おうう〜。今きく処まこ妾ハ強
賊鉄盾の妹とる。渠賊心ハあ〜まこる。既ふ刑除の者ふるこ。愛ーのふハ悲

非るう。曲てこの議ふ従ひゆ。砒霜砒石も貯へざるべ。急用ふ備へべう。豫く
七日ことハあるまことも。既ふ砒霜と畜ひるハ。切ことべき貴所の僥倖。この心
と煩ハー。痴情ふ惑ふこうハと。説諭さまこて。忽地ふ時直ハ頭こ擡げ。かく條
ふやその始め。吾阿武隈ふ乞ーこの。渠ハ聊仔細ふ。吾傍へハ出ーがこと。
こるこも必入まこ。只顧乞て側室こる。かの唐帝の故事ゆ〜ねこ。天ふ向の〜べ玩
異の鳥地ふ向の〜べ連理の枝こ。契ゆこ。今更ふ刺客こるこん心ふ忍び。故ふ
彼是黙止せーべ。そ〜こ処こみ道理。その後ふ従ひこうこんのこ。この計策ハ阿
武隈こきふ教へ。吾ハこ何のも。知〜ぬ分ゆそ。あ〜こ。既ふ決ーて三人。且く酒宴こ催ー

續輯第六

美人一曲 鑠鐵心

饗應酒飯果蜂蠆

かくて朝夷三郎義秀ハ。憶ゆくも一三翁ゆ。事ふ就て滞留せーも。一日の間ふ用

朝夷七編巻三
あん童
ぢろう
ぎんこま

朝夷七編巻三
いそぢ
湯島磐城 著
同志妙計 巡らす
〇十三

ハ果しぶ心中更ふ穏ふ[illegible]。判五田鶴姫ハいふもさらなり。一三もまた此のごと。是も所謂天命ふて。人力のう及ぶべきと。再三回思ひくせど。恩愛の情胸ふ逼の長別離苦と歎くまで。日来の勇気もこの時ふ半摧けし心地して。立も懶くなりぬべし。斯てハなじと気を励ます。その明の朝ことさらく。道へ[illegible]駒の足捻ふ任せ[illegible]とゆく序ふさても岩神ふる巴の尼のかくべくハ[illegible]ぞ。今こそあれ日数を経るば。三翁が音信と今ろ〳〵と候任のうん。あらまほしき城戸水草のうち。何まるのとも古ふあらば。そのよう書翰を齎して。ぞ邦へ遣んものと。そもさく武蔵へ領ぎりて。跡ふ遺るハ雑人のこ。物の要ふ[illegible]ふ[illegible]ものゆゑぞ。それ[illegible]先陸奥へ到ると著て綽を済し。次ふ[illegible]ふりて岩神へ立るとも害ふくん。ぞ老年ふ少しの間も。物ふ[illegible]ハ便なけまと。今さふ注方ぬ[illegible]ぬ[illegible]と心と決め。今日と為行習と潮りて。再び眼ふもみちのくや。浸の折磨とぶ[illegible]川の関とも超く日と重ねて。ふ[illegible]

城の守護職ふる。四郎時直ぶ館迎くとう。雑人と走らして如此このうしいえせけまバ。然かとて時亟い衣服と改め。陣代阿武隈大夫と始め。侍分十八人。路の傍ふ踞して。威伐と剽裏ふ並居たり。朝夷そまこうふりも。馬より下て徐ことぞ。ぞ[illegible]ぶ候へ立倚て。在下ハ和田の三男。朝夷の三郎義秀なり。這回陸奥磐城ふ於て。疆界の諍論あり。守護地頭の面これ。決し兼ら仔細ありて。遠く遠[illegible]へ検断使と。ふふふふり在下として。その検断使ふ[illegible]下る。委細ハ逐こ兼りて。其可否決ぶ。然るべき旅館と下知して。案内とのさきれとのふ人こ額著とり。四郎時直はるくと。義秀ぶ前へ臻こと。在下ふ[illegible]所の守護四郎時直と與こ[illegible]。宜ふぶく疆界の論百姓ぶのこふ[illegible]ぶ諸士の荘園も雑こて在下ふ計らひぶく。因こハ公裁と作ぶの處ぶ[illegible]朝夷大人。その任ふ撰まれかん長途の下向先りて。尊粋ふ志ふく到著のぶん在下ふも喜び存ぶる処なり。勿論ふ日[illegible]

倉よりその由通達ハひしかど。昨日今日とハ思ひよらん迎へ奉らぬ无礼とてバ宥恕ありたまひりね此処等の涉ハ片鄙にて。旅館に充べき家も稀なり。物不自由なれ思ひたまへけれど。僥倖在下が家ハ廣し。且この以来衆人を。集會にも便よけれバ。手が茅屋を仮住の旅宿に定めたまへとのみぞその詞の慇懃なるまで朝夷もまた禮を尽しつ。頓て人々の案内に任ぜ。かの時直が破へ到るに。その構へ厳重にして。外面にハ惣隍あり。玄関書院客房より廻廊を渡てゆけバ庭の在さる種々の奇石を畳みて山とあし目なれぬ樹木枝ちち交し泉水の廣らかなる傍にハ橋を架。小舟一艘を浮めたり。已が時とて築山のかなたこなたハ暗の夜も照すをぞらりの楓の黄葉に争ひそむる山樗の枝撓むまで熟しるその氣色いと興あり。また開かねど雨障子を架まとしたる花櫃の菜或ハ水仙山茶花など。時得て咲ん風情をみせたり。朝夷ハ元風流なることを好める氣象にあらねバ。眼を止むるまでハあらねど心の裡に思ふやう。時直が俸禄限ありあるをかかる驕奢の景勢。同でも知るべし百姓们が膏を絞りて已が身の栄曜とするもと覚えたり。いと憎むべきの狡者なりと心労すのせしまで。頓て奥なる一間へ入れバ阿武隈太夫ハ其處に踞し。是こそ刀祢の憩ふべき客房にてはと。頓着なれど朝夷もよきほどに答釈をなしに衛をと上座に居ずなほれバ。磐城以下の面々も。頓て端近く坐をトて甫田長途の労を慰し。備その諍論の始めハ箇様々々。それより如此々々のなりゆきと粗ぞと演説ませまらバ。朝夷逐一聴畢て。その次第ハ大概知りぬ。然れども其人々と親近正きに非らぞれバその是非を辞まへがたう。されバ明日黎明より在下彼処へ参るべきまでハぞらひの各々へ觸知らしておとぐべし時直畏りぬと。阿武隈等ふのひらつて。觸文を出しける當下朝夷を歓待すべき。準備大くに整ひねとて。かの廻廊の与りより。庖宰等が持出たる珍膳美味ハ甚ならうるるまの席に陳るぞり。然ハとて時直ハ盃を揚。朝夷に勧るなどに。

その頃の背気ふよう。酒もこのゝ欲くれど。使節と食後を辞まんも忍ぶこと。
二三杯と頒けて。夫〻へ酌と斟まこ甲乙とり長と勧む。辞まることすれと敵ゆか大勢。
此方ハ一人そのゝ人ふ酒量とき〻強けまべ。固くも辞まを飲ゐぶ。ゐいまを十四五杯
傾けこれば。背気も聊散ゞ。快く光ゆゝ。猶数杯と喫〻う。秋の日ゲの
さりげゝ。四下も暗くゝゝふよう。燈臺数多掲げ出〻。真日中の如く燈火と顕じて
頓て酌酒ふ主客十分の醉と覚〻。勝さゝ崩ゝ半ゝとり。當下時直ハ扇と披き。
訛ゝ歌をとりあげて。朗詠と謡ひ。少〻く立舞ふ風情と做〻。偖朝夷ふ射ひて
ゝ〻中う。大人ふ射〻て元祐とも。思ふべけまゞ長ひこま。和と以て貴〻とする。酒の所為
ゆてゝべ。今宵ハ都て許〻ゝ。在下一人の妾なり。名とバ磐てと呼びいゞ醜くけれ
ども絲竹の調べふをき〻巧ゝをえゝう。かく言ばゝゞ佛ゐる〻とて涛るゝうと。ゐ
きんゝの恥〻けまゞ張会ふゝも渠が類ひ多くふあゝじと思ひゝゝ。ひのゝれ旅中の

慰さゐふこまゝ。ロて一曲と奏させんといひけまゞ。朝夷かるとゝバ好まゞ。苦笑ひて
回答さゝまゞ。ゝゝ先ふ阿武隈ふ勝と進めてこまゞゝう。頓ふ舞ふ〻て
遽さる朝夷を狂めんゝふ思ひけまゞゝ。ふの輩ゝ悪ゝと喪ゝて。真と醒さゝも天
益ふ似ゝう。好も可も容ゝとり。大海のゆ〻とのゝ。その溺〻と溺まゞゝ。落〻の
心ふ有り。強てまゞを飛まんやと思ひ返〻てゝあるゝとふ。怖て准備やゝゝりけん。女の童が
二人〻て。捧げゝて来る琴二面。主の傍へ開ゝ。続きて倫〻出来ゝ。その年十九ゝ二十
計ゝ。金襴頻類と。身ふ纏ひて。その嫌弱ゝる行粧ハ。沉魚落雁。羞月閉花と。唐山
人ゝ。美人と讃ゝる言葉ゝのゝ揚柳の。條ふ咲ゝる桜のゝ。まゞ。長牡丹ふ梅ゝ香
と。含まゞゝる風情ゝ。その儀黛を遠山ふ。今没かゝる三日月の。要時たゝ。ふ。
朱の脣。愛敬づきて。綻びかゝる海棠の。花の色ふも。髪髪ゝ。ゝ湯の朝夷。
も熟と祝てゝまゞとゝ。多くゝゝ美人なゝう。昔語ふいひ傳ふ毛嬙西施もかく

さはあれど然ればかの白居易が傾城傾国のその色には遭ざらんに若じといふ
嗟恐るべしくと心に暁りて自若としてその為容を視居るに然るは少し會
釈して膝の辺へ玉琴をひき寄してうちかき鳴らいと伪なく侍るとも鎌倉
よりの使ぞみ。飲侍よりの主命を辞さがたくて阿容もせずて若刀祢原の思
はるゝことさへ愧ぬ挙動と鳴滸よみ呵てかひそと推る琴柱は時にあくれ
稍闌て居がみの。ころ容にも似るべし。頓て調子も愛敬の溢てめでたく紅の
口を開きて今様と謡ふ一節青陽に。漢の戸出し常の。たつ音なるずは秋の雁の。
艸葉に集鳴鈴虫の声までもあくぞ聞える。集会る人々数回称讃しつ首傾け。
或ひは顋を突出して。膝の進むを覚えねまでに少惚て餘念なし。就中時丞は。
一人笑壺の會に入ずいと綺をかふに坐席をえるよう。まさ睨に然をとて見てぞ莞爾て
と微笑のみ朝夷は當下ふれや十二分の酔を發し。日来の性とて是等のことを。

五月蝿とは思ひけれど。今更に酒嘸の興をさまさんも本意なしと思ふものからその
果るを心に愛ずて候わどに頓て一曲を奏で畢ときは。やをら身を起して時直に對ひ。
倩も今宵はおもひもうけぬ種々の饗應に遭まゐらせ。心ならずも沈酔すり。就
ては長途の労らへ身に滞りたれば。今は暇を賜るべしといふに時直今宵時
し駐めても猶辞むによりて。然らばといひて是よりは一間隔ちて奥まりたる四畳半
八畳敷なる所へ侍女をもて誘ひせ。諸て傍に敷儲る床のかたへに燈臺を
引寄せみとして出んとた。當下朝夷呼止めてわが従僕等に。旅の
洞度ふつへ持来れと傳へてよとの給はまゞ。かの侍女等一手うけたまはらう。
倶の人は表座敷で酒を給べてゐしが。僉酔て打ふし憩ひ持参るのの
纏かのものを。あれく運び来りせんと。やて朝夷うち笑ひ。館の東西は鬼まれ角まれ。
坐右へおくでは快く眠がたき品なれば。それと此処へと。わざより。汝等両三個して

よく持来んや然ハあれど。まづ試みに持て来べし。その東西ハ細布の袋に収めたる長き物なり。凡ハ汝達が背ねどあらんと説示されて侍女等ハ。ゑうく彼処へ走至りぬるに果してその東西あり。是なめりと前後に手をかけて持んとすれど。その重きこと巌のごとく地を離れず てあけまれば堪かねんしていよく難じ。侍女共ハ顔見あはせ。互に呆れて云業なき 傍に居たる鉄誠の小奴等。そもまと何方へ持ゆくにやいざくし膂力を試んと。ひつ倚て手をさしかけ。持んとするにあらじ及ばざるにてもこれハ是何等の品ぞと袋の外より手をして探るに一條の棒なり。是ハ正く鐵なりん。朝夷主が何どの要にせんとて齎しゝ。現に長旅の厄介なれど或ひハ謗り或ひハ訝るぞこれ維も来よ彼も来よと人四五個を呼び集めてやうやうに持あげて肩にかけて侍女の案内によりて朝夷が臥房の侍へ来てまづ開て見せよとて仰の品を持て参りぬ然にても這ハ何等の料にとて齎しゝ。

僕去年鎮守の祭祀に四十二貫の石を挙て邑に二となき膂力持の名を取たりし漢土ながら今日ハ大きく洞口なり。何貫ぞあらんやとの心に朝夷微笑で。何ぞあらや吾も知らずを更ば汝ハ人並に勝る膂力わりながらぞこれを持ねバ使ふことこそ難かりぬ。挙るかぎりハ輙き事なり。今一回持て見よといへれてまことに懲ずまに立ちかゝりて力を究め挙んとすれども更にゆがまで面を赧らし腕を撫摩ながら退ひて。あらし及びひれど。但和君ハ一個して持参なさん不審と首を傾げて問やどに朝夷衝ことと立出て。やがて袋の紐を解きぞすらしと曳出せしその形ハ八角にて一丈余の方と細くの先ハ次才に太やかなる。鉄撮棒にてありければ小奴等ハ膽を消して。昔語にきくおよぶ大江の山の鬼神にあらずハ水滸傳なる花和尚が鉄禅杖を携ゑしハ画にみたるのみ眼前にハ始めて視たる鉄撮棒。和君ハ使ひなかにや真へりきぞ是にてまで人を威もの閻思君にやあらずなると呟くを朝夷ハ少も敢て問く

とうち笑ひ。汝等己が分量をしらで。人を侮りてなりとも使ふに堪ざる東西と齎し。彼の
の用に備ふべき。猶疑れで酔醒しの興に一揮本事を見せんとていひつゝやをらかの
棒をばいと軽げに引提て。椽より閃りと跳り出。広庭の真中に立て。彼攙棒を使
ふこと。宛然苧殻を扱ふごとく。うち揮るたびに立ところ。空気の音さへすさまじかりければ。小奴
等ハいふも更なり。侍女どもハ怒ろしさに。什麼幾千の膂力なるや。凡人にてハあら
ざりけりと。舌を捲てぞ戦慄ける。朝夷ハ思ふがまゝに。半晌ばかりうち揮て。此頃
久しく膂力を試さず。覚束なく思ひしが。さして衰ざるこそ嬉しけれ。嗟快し。腹も消
化ぬ。いざ憩まんとて。かの棒を閨の壁にうちもたせて。そのまゝに臥ければ。侍女小奴ハ暇を
告て。障子ひきたてゝ出てゆく。朝夷ハ頓にも寝られず。心の裡に思ふやう。彼等に対
して稚なくも。腕だてせしハ烏滸なれど。囂々しくも罵りたてなバ。暗に己が威を示
もそれ足らぬ思へバよきことをなしてげりと。慢に悦び思ひけり。かくて件の小奴等ハ。で

そのゝちの珍らしさに有しがまゝ玩物ぞかし。頻りにこまごまと誉嗟して。称る人を尊る
信もてまさ侍女等も去りと退きぬ。其人至りて如此ことのよしありなりと語りつ。阿修羅
土の化身にあらざれバ。金剛神の再来ならんと。只管戦慄懼れて。籠城の阿武隈湯
島など。各々耳を欹て。ひそひそと居たりしが。侍女等の退くを俟て。朝夷ハ世にも稀なる猛者
なりと聞てハあれど。斯のごとくならんとハ思ひ居ざりしが。侮りがたき壮夫なりとそれに就
ても阿武隈ぬしの計策こそ一段なれ。北條刀祢が平生より。忌嫌ふも無理ならず
然りとて怯者ハ心雄くして。万に一も仕損ずまじ。が強者が腕ぞとも。今宵限りぞと
なくざる愚さ。嗟笑止やと顔見あはせて甘りくと笑みを含みす。千葉般若ハ阿武
隈より。逸く謀を授られて。心の裡にかやくくと。その為様を沈吟り。夜ハ更るを俟
れど。ふたや子の鐘も叩えて。人みな寝定まり。四辺寂寥となりければ。時分ハ
よしと回廊を抜足なしつゝうち廻りて。頓て朝夷が臥房へ至り。障子の透より窺へバ。

朝夫
鉄撮棒を
振り
衆人を
薙ぎ
ふせぐ

ふせぐ

熟睡をさりゝ折ふし鼠の声のゆるゆゑ思ひ一ようい便よゝと心ふ歎び懐なる。
匕首の鯉口と。甘げゐゞ〜てきゝ要時裡のゆうと窺ひ。徐ふ障子とひき明て。
匹足と入まゞ朝夷い。保迄りして眼と開き物ゝゞいそゝ見を祝る秘ゆい形とうん
るようも。猶逞然と歩行ゝ。袖の袖ふうわゝれ〜まゞ玉妻時いゝ歩さゝ物
思ハ〜ゐふありけるゞ。頓て袖ゆゝ口と浚ひ。鎌倉よりの宿ゆ谷ゞね殊ふさゝゝる紙妻
人の。和君ふ封〜かゝいゝゞいと元祖ゆる女子ゝと呵ゝもゆふ〜れゞも。恋ふ貴殘の
隔ゐ。そゝき明〜き苦〜ふ。古き哥ふも〜ゝ〜ゝと元岡〜ゝゝ霄ふ酒嚥の席ゝ召
きて君と祝〜ゝゝも。肌の波風集きゝゝ。平生ふゝ別〜琴ゝゝ。その糸條ふ逢ふ
まで思ひ初ゝる。忍衣。袖も袂もあゝれゝ。潛ぎするゝふいせゝの蜜の把ひ〜
貝ふあ〜ゝるゝふ。元ゝひゝゝる哀〜ゝの。涙い夜半のゝゝ時雨峰の黄葉と今さゝ。
散ゐゞいゝゝゝのゝゝと人傳ゐ〜ゝゝまゝゝゝゝ嫌いゝゝゝゝゞ失ゝゝゝゝゝ此ゝ〜止づき

と。烏滸ふも独ふひつめ君びて来ゝ〜心裡と憐ゝゝゝゝとひけゝ頼ゝゝゝ
その在ゝゐゝ小萩の花ふ恋ふ。ゝゝて技ゝゝゝゝる風情あ。朝夷熟ゝ果て忽
地ゝ〜ゝゝ笑ゝゝ陸奥人の物数奇ゝる吾脇の緒と新〜ゝ。女ふかゝも桃
まれゝゝ。夢ふも更ふ覚えゝ。殊ふ美人の居膳ふ者ゝゝゝ者ゝいゝる。然ゝ
どゝゝ〜ゝ〜ゝ。倚ふ時直ゝれゝ対ひゝ盤ゝゝゝゝ妾ふ筝弾ゝゝといひゝれゝ。
其方ハ此処の側室ゐゝ〜。既ふその主ゝゝゝゝゝ逸早ゝも他ゐ人ふ嚇ゝゝゝゝゝ
水性ふゝゝゝまゝ才ふ好ゝゝ〜ゝ。ゝ吾ゝ〜ゝ来〜新猶ゝゝ及ゝゝゝゝゝゝゝ公の
使ふ立て他の側室と密今ゐゝゝ。ゝの罪万死ふゝゝゝ。ゝゝ才ふの障ゝゝゝゝ
ゝも怒びつ。其方の望ゝゝ恨ゐゝゝゝゝゝ用果ゐゝ頓ふ去ゝ〜。富下倶ふゝゝ往
ゝゝゝ。愁心と悩ゝゝその益とする所ゝ。是ゝ三の不祥ゝゝゝゝゝゝ志ゝ嫉ゝけれ
とも諾ゝゐゝ。夜陰とゝゝと長居とゐゝゝ。天知地知のゝゝゝゝゝ頓ゝ性ゝゝゝゝ懲

それとも猶磐をハ動きもせぬ今宜ハすべく爰理ハて亦更ふ返一言べき術もなし。藻ふすむ虫ふあくれ吾ゝ愧てうよく冷よと思ふまぢらち歌うまて行きとも所詮恨ハめてゝ重わて物ハ云ままに然ハあれとも仰するぬく。脱ふ主あるゝ才とうちそ。恥ゝくもかれ口説心の底の切るさ我千分ゞ一も推量あるゝ賤ゞ伏家ふ育る。花香ゞふるれ深山水と一枝ゝ折ゝ誰ハいれと紲るべき心強きも程のあるものまく帰て往るゝ。空怖ちく恥ゝ忍びて行へ来ハんや懈まゝゝ久とハひゝも縫絆の袖でゝ拭ふ赤水ふ恋ゝ水ふ恋ゝ。餘義なきゝゝ人えけまゝ。朝夷ハ頓ふも逐ゝ顔ゝち浅ゝて居ゝゝゝ畢竟朝夷心ふ愛情ふハゝまて奸計ふ罹ゝゝ罹ゝゝゝ次の巻を續て知ゝ

朝夷巡島記全傳第七編卷之三

吉田屋 吉田屋